

アムスルだより

No.19 1996年 5月10日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

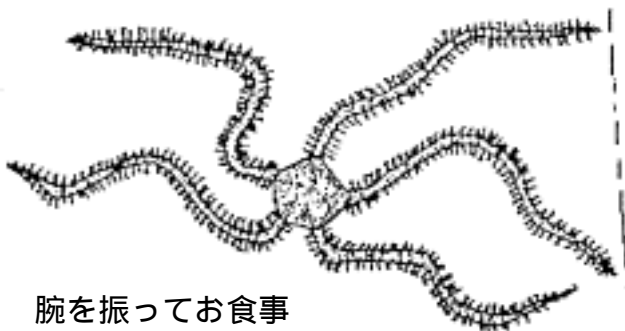


〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

TEL:098-987-2304

FAX:098-987-2875

アムスルとは、阿嘉島臨海研究所のニックネームです



腕を振ってお食事

-クモヒトデ-

春の大潮は昼間に最も潮が引くため、島のおばさんたちがサンゴ礁のイノーに下りて、貝やタコなどの獲物をとる光景がよく見られます。この時、岩陰から毛のはえた黒いヒモ状のものが伸び、ユラユラ動いているのをよく見かけることと思いますが、これは何だかわかりますか？そこで今回は、誰でも気軽に観察できるクモヒトデについてご紹介したいと思います。

クモヒトデの仲間、潮間帯から水深3000mの深海まで広く分布していますが、サンゴ礁の浅海域にもごく普通に見られ、阿嘉島では19種ほどが確認されています。ヒトデに似た形をしていますが、これとは異なり、腕と体(盤といいます)の区別がはっきりしています。その腕を自由に動かすことができます。このため、すばやい移動が可能で、かくれるところのない、岩の上などにいるクモヒトデに近づくと、

腕を大げさに振りながら、あたふたと逃げて行きます。

阿嘉島周辺の潮が引いたタイドプールで、最も多く見られる種類はウデフリクモヒトデです。この種の腕にはもう1つ大事な役割があります。一度引いた潮がふたたび満ちてくるとき、ウデフリクモヒトデは細長い腕を穴から出して活発に振ります。なぜ腕を振るのでしょうか。それには理由があります。クモヒトデは、つかまえて容器に入れると必ず隅に移動することからわかるように、いつも体を何かに接触させたがる、つまり、穴などにかくれたがる習性を持っています。ところが、名前に「クモ」がついていても、網を張ったりはできないので、かくれっばなしだと餌を捕まえられません。つまり、ウデフリクモヒトデは体はかくしつつも腕だけは出し、これを振ることによってプランクトンなどの水面に浮く餌を集め、食べているのです。この様子を見たいと思ったら、魚の肉片をウデフリクモヒトデのいるタイドプールの中でつぶしてみてください。ウデフリクモヒトデは餌のあることを感じるとすぐに腕を伸ばし、そりかえらせたりねじったりして腕の腹側を上にし、さかんに動かし始めます。

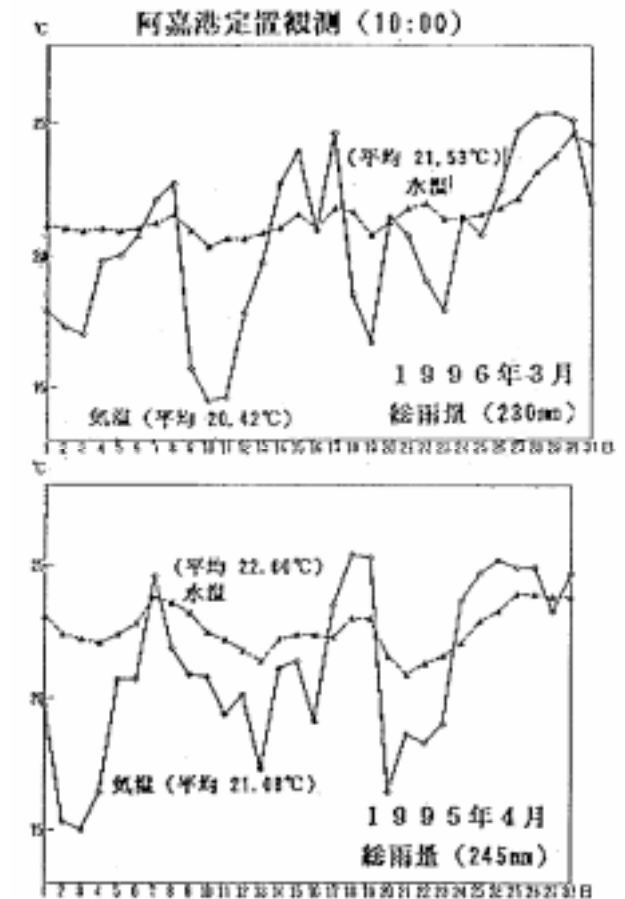
このように大切な役目を持った腕ですが、これは非常にもろく、穴から引きずり出そうとして無理に引っ張ると、あっけなくちぎれてしまいます。ちぎれた腕はそれでも5分以上くねくねと動き続けますが、これは魚などの天敵におそわれた時に、その目をごまかす「トカゲのしっぽ」の役目を果たしているのだらうと考えられます。

クモヒトデは、見た目には少し気持ちの悪い小さな生き物ですが、よく動く腕をうまく使って、危険の多い海の中でたくみに生きています。北海道ではカレイなどの魚の胃袋から、たくさんのクモヒトデが見つかります。しかし、ちぎれてはいるもののそのままの形で残っているところを見ると、どうやら消化はあまり良くないようです。

阿嘉島の海より

-ミドリイシの産卵-

今年もまたサンゴの産卵の季節を迎えました。これまでの阿嘉島での調査の結果から、最も普通に見られるサンゴであるミドリイシは、水温の上昇とともに体の中にある卵の成熟が進み、5~6月の満月の3日前から7日後の期間に集中して産卵することがわかっています。5月2日の満月から7日がたちましたが、サンゴの卵はまだ十分に成熟しておらず、産卵は見られませんでした。次の満月は6月2日ですが、この頃には大部分のミドリイシの卵が成熟に達し、一斉産卵が見られるものと予想されます。研究所ではこの時、違った種類のサンゴの卵と精子が受精



するのか、また卵が受精した後の幼生が、どんな条件のところに着生してサンゴになるのかなどの実験を行います。これらの実験をするためにも、産卵のデータ収集は重要な仕事の一つです。サンゴの産卵を見つけた方はぜひ研究所までお知らせ下さい。

今年座間味村の小中学校で、沖縄県へき地教育研究大会が行われます。その一環として、阿嘉小学校の児童たちは、サンゴをテーマにした自由研究で、サンゴの産卵やサンゴ礁を観察するそうです。私たちが住む阿嘉島の素晴らしいサンゴ礁について理解を深めてもらうため、研究所もできる限りお手伝いしたいと思います。